

〈論 文〉

メキシコ市参事会における旗手をめぐる考察 (1528年 - 1650年)¹⁾

立 岩 礼 子

キーワード

メキシコ植民地史, メキシコ市, メキシコ市参事会, 王旗, 旗手

Resumen

Este trabajo tiene por objetivo analizar las responsabilidades del alférez real de la ciudad de México durante el siglo XVI y la primera mitad del siglo XVII, a fin de poder examinar la fidelidad que guardaban la ciudad y su cabildo hacia el monarca, ausente del territorio americano. El alférez real de la ciudad de México tenía la función honorífica de alzar el estandarte real en las fiestas cívicas que organizaba la ciudad y se encargaba de los preparativos de dichas fiestas, lo que le exigía unos gastos considerables. Como el cargo era rotatorio, las quejas de los regidores del cabildo de la ciudad de México fueron creciendo hasta tal punto que se decidió vender el cargo. A pesar de que aparecieron algunos compradores, la venta nunca llegó a realizarse debido a la oposición del monarca.

Con el propósito de analizar los problemas que se suscitaron en torno al oficio de alférez, en el primer capítulo definiremos su función y en el segundo recogeremos las voces de los regidores que rehusaban aceptarlo. Finalmente, en el tercer capítulo examinaremos las cargas económicas que soportaba el alférez, las medidas de financiación para suavizar dichas cargas y la decisión de optar por la venta del oficio. Como conclusión, hemos llegado a descubrir un posible abandono o cierta actitud de desinterés por parte de los capitulares en mostrar, aunque de forma simbólica, su fidelidad hacia la corona alzando el estandarte. Este distanciamiento tuvo lugar en los años posteriores al primer centenario de la conquista de México, lo que supone un indicio del cambio o de la transición en la mentalidad de aquellos vecinos de la ciudad de México.

La principal fuente de nuestra investigación han sido las Actas de Cabildo de la ciudad de México, conservadas en el Archivo Histórico de la Ciudad de México. Para poder consultarlas hemos obtenido la subvención *Grants-in-Aid for Scientific Research* del JSPS (*Japan Society for the Promotion of Science*) con el número de proyecto 24520845.

はじめに

中世スペイン以来、王旗 (el estandarte real / el pendón real) は王権を象徴するシンボルの1つであった²⁾。例えば、アルフォンソ 10 世の即位にあたり、スペイン各都市では王旗を掲げて祝っている。つまり、中世末期、王旗を掲げる行為は王に忠誠を誓う証でもあったのである³⁾。14 世紀のトレドでは「王旗のもとに戦う」と言っており、たとえそれが王が命じた戦いであっても、それほど地位の高くない貴族のもとで戦うことを拒否することがあった⁴⁾。つまり、王旗を掲げて進軍することのほうが名誉であったのである。そして 15 世紀から 17 世紀にかけて、この王を象徴する旗が戦場を離れ、あらゆる公式行事に登場することになった⁵⁾。その際に、王旗を掲げる役目が旗手 (alférez mayor) であった。スペイン史上において旗手はもともと軍隊に属する職務であった。スペインの約 800 年に及ぶ長いレコンキスタの歴史の中で、旗手には、征服した都市に王旗を掲げて入場するという極めてシンボリックな儀式を執り行う役目が付与された。そのため、この旗手に選出されることがいかに名誉であったかということと同時に、いかに重大な責務を果たしたかという点に注目せざるを得ないのである。

しかも、スペイン国王不在の新大陸の領土においては、どのような状況だったのであろうか。おそらく、王旗は王印 (el sello real) と並んで、スペイン国王の存在を可視化する重要なものであったに違いない。王権のシンボルとしては、本国以上に重要視されていたかもしれないのである。そして、その王旗を様々な儀式において掲げる任を負った旗手の地位も特別のものであったと推測される。実際、スペインが支配したアメリカ大陸の植民地の各都市には、公式行事の際に王旗を掲げて行列の先頭を行く王室付き旗手 (alférez real) という任務が存在した。そこで本稿では、スペインのヌエバ・エスパーニャ副王領メキシコ市における王室付き旗手 (以下、旗手と略す) の実態を検証する。まず第 1 章では旗手という任務を定義する。第 2 章においては、メキシコ市参事会における旗手の選出をめぐる議論を分析する。そして第 3 章で旗手に課せられた負担についてを考察し、旗手の実態を検証する。旗手に関する資料はメキシコ市参事会議事録に集中しているため、同議事録を中心に分析を行う⁶⁾。

1. 旗手の任務

1. 1 征服時

ペルーのクスコ征服の凱旋の折には、ヘロニモ・デ・アリアガ (Jerónimo de Aliaga) という名のスペイン人が王旗を掲げて入場した⁷⁾。残念ながら、メキシコ征服については、その記述がない。テノチトラン陥落の詳細はエルナン・コルテスの書簡集、フランシスコ・デ・ゴマラやベルナル・ディアス・デル・カスティーリョの記述にもある。しかし、メキシコ市建設中にスペイン人たちが拠点としたコヨアカンから正式にメキシコ市に凱旋した時の記録は残っていない。コルテスの秘書のゴマラの記述にも見当たらない。当時コルテスは遠征中であったことから、本人も記録していない。ディアス・デル・カスティーリョもコルテスに同行していたためか、メキシコ市凱旋時について書き残していない。

新大陸における君主不在での征服事業において、少なくとも副王制度が導入されるまで、王旗はスペイン国王を可視化する重要な存在であったと考えられる。ヌエバ・エスパーニャの最初の

副王が任命されたのが1535年であるから、1521年から1535年までのおよそ15年間に注目する必要があると思われる。とくに1521年から1527年までの7年間については、征服者エルナン・コルテスの存在を無視できないと思われるが、現状ではこの点を解明できる資料がない。ただ、漠然と、当時は王旗ではなくコルテスの旗を掲げたということが18世紀に至っても信じられていたことが確認できている⁸⁾。

メキシコ市の旗手に関する記述が資料に登場するのが、1528年のメキシコ市参事会議事録である。そこには、フアン・ハラミーリヨ (Juan Jaramillo) が旗手に任命されたことが記してある⁹⁾。彼は、コルテスと共にメキシコに上陸した13隻のうちの1隻の船長であり¹⁰⁾、メキシコ征服後にはホンジュラス探検にも参加した。コルテスの通辞であったマリンチェを娶って、マリアという女子を授かっている。つまり、コルテスが信頼を寄せる人物であったとも言える。1528年以前の議事録が存在しないため、ハラミーリヨ以前に誰が旗手を務めたかについては不明である。

1. 2 任務

旗手は、メキシコ市参事会が慣例としている全ての儀式に出席するものとされていた¹¹⁾。17世紀においては、次の10の祝祭が出席の対象となっていたことになる。すなわち、メキシコ市在住のスペイン人たちの信仰対象であり、雨乞いのために祈ったレメディオス聖女の行列、聖体の日、メキシコ征服を記念する聖イポリトの日、地震対策の聖グレゴリオ・タウマトルゴの日、疫病退散を祈った聖ニコラス・デ・トレンティノの日、16世紀に教会に大きく貢献した聖テレサ・デ・ヘススの日と聖イシドロの日、ヌエバ・エスパーニャ出身初の殉教者となった聖フェリペ・デ・ヘススの日、1552年に中国で殉教し、1622年に列聖された聖フランシスコ・ハビエルの日、1671年にアメリカ領初の聖女に列聖された守護聖女リマの聖女ロサの日である。このうち16世紀から祝われていたものは、最初の3つの祝祭—レメディオス聖女の行列、聖体の日、聖イポリトの日—である。無論、国王の即位式をはじめとした特別な儀式の際にも、旗手が登場したであろう。

任命を受けた後には、旗手は以下の事項をはじめとした諸々の約束事を守らなければならなかった。

- 1) 任期中はメキシコ市にとどまること¹²⁾。儀式や祝祭の準備を最優先するため、メキシコ市の外に所有するアシエンダを経営している場合であっても、他の市の職務を兼任している場合であっても、メキシコ市を留守にすることは許されなかった。ただし、特別な許可が申請できれば、短期間の留守を認められることはあった。
- 2) 王旗を管理すること。当初、王旗は旗手の自宅にて保管されていたようである。参事会の建物が完成してからは、そこへ移管されたようである。
- 3) 参事会から補助金を受け取り、管理すること。儀式や祝祭に必要な費用は旗手の個人負担であったが、議員たちの要請で、参事会から一定の金額が提供された。その補助金は、参事会が管理していたテナント料もしくは治水費用から充てられた。
- 4) 儀式のみならず、祝祭行事にも参加すること。儀式そのものも長時間に渡り、祝祭期間は数日あるいは数週間にわたったが、その前後の行事の準備のみならず参加も義務づけられていたようである。とくに馬上槍試合への参加は強く求められた。

ただし、旗手は1人だけで準備をするのではなかった。補佐役として祭事係 (diputados de fiestas) が2人配されていた。彼らの任期は1年であった。やはり、メキシコ市内に居住してい

ること、法律関係の仕事をはじめとした王室の仕事によってメキシコ市を離れることがないことが条件であった。

1. 3 条件

旗手としての条件は特に設けられていたわけではなく、明示されてもいない。しかしながら、資料の分析から、以下の事項が条件となりうることが判明した。

- 1) メキシコ市参事会議員であること。
- 2) 在職中であっても犯罪の罪に問われていないこと。
- 3) 犯罪の容疑で出廷している身分にないこと。
- 4) 祝祭に係る費用を負担するだけの経済的余裕があること。
- 5) メキシコ市の名誉を傷つけない人物であること。

これらの条件を満たす人物が、メキシコ市が威信をかけて執り行う行事の旗手として選出されたのであった。

2. 選出をめぐる

2. 1 選出方法

旗手は参事会議員 (regidor あるいは capitular) から選出された。先述のように、メキシコ市の記録に残る最も古い資料から、1528年にハラミーリヨが選出されたことがわかっている。メキシコ市参事会の初期の主要メンバーは征服者の面々であった。彼は翌年の1529年も、翌々年の1530年も旗手として選出されている。ただし、いずれも聖イポリト祭の時期にメキシコ市を不在にしていたため、実際には旗手を務めなかったようである。しかし、代わりに誰が務めたかは不明である。

本来であれば、旗手は王もしくは総司令官から任命される地位であろう。しかし、当時は新大陸の統治がまだ始まったばかりで、王室の意向は反映されていなかった。また、ヌエバ・エスパーニャではアウディエンシアの長であったヌーニョ・デ・グスマンと征服軍を指揮したコルテスが統治の実権を巡って反目していたこともあり、おそらくは王旗掲揚をどちらの勢力の人間が担当するかは重大な問題であったと考えられる。

メキシコ市は1530年に王室から市であることを認められ、紋章を授けられた。これによってメキシコ市参事会にも正式な地位が与えられ、紋章入りのメキシコ市の旗も整えることができた。いよいよメキシコ市として王に忠誠をあらたにする機会となったことは言うまでもない。メキシコ市は新大陸における主要都市としての地位を確立し、その地位にふさわしい旗手を選出して王旗を掲げることは、むしろ義務ともいえるべき責務となっていたのであろう。メキシコ市参事会から旗手を選出することは、国王への忠誠を誓うだけでなく、メキシコ市の威信を維持する重要な役割として受け止められ、旗手はその期待に応える必要があった。

また、旗手は軍人として優秀かつ功績を積んだ人物であることも求められ、メキシコ市の防衛を象徴する人物でなければならなかったと思われる。当時メキシコ市のスペイン人居住区は、先住民居住区に周囲を包囲され、いつ報復を受けてもおかしくない状況にあったことを忘れてはいけない。従って、1528年から3年連続で、コンキスタドールとして武勲のあったハラミーリヨが

選出されたのもうなずける。議事録には、彼が旗手に「ふさわしく、申し分ない」と記されている¹³⁾。

しかし、王室は、国王不在の新大陸にあって、旗手の選出を現地の参事会の決定に任せたままにしたわけではなかった。1530年に女王が勅令を出し、旗手は議員年数が最も長い者とするとした¹⁴⁾。その任期は1年であった。しかし、議員職には任期がなかったため、これでは議員歴が長い者が辞職しない限りは、その人物が長期にわたって旗手を務めることになる。そこで、議員歴が長い者から短い者へ自動的に1年で交代すると解釈された。

植民地統治が進展すると、メキシコ市に集中していた議員たちは、副王領や近郊の都市の統治機関の職にも就くようになった。そして、議員以外の仕事や地理的な距離を理由に、旗手の任務を辞退するようにもなった。メキシコ市参事会は順番が乱れることによって1530年の勅令を遵守できない事実を重く見て、「これ以上混乱が生じないように」、副王に旗手の任務を免除されるケースを定めてもらうよう依頼するまでの事態にまで発展した¹⁵⁾。

2. 2 任命時期

当初、任命は聖体の日の後、およそ6月中旬頃の参事会で行われていた。従って、聖体の日には旗手は参列していないことになる。つまり、教会主導の行事には参加しないということである。旗手は任命から2ヶ月後の聖イポリト祭に向けて早々に準備を始めなければならなかった。

その後、参事会議員の様々な任務を決定する毎年1月2日に任命されるようになった。参事会では旗手の順番が確認され、任命はその場で認められた。持ち回り制であったため、たいていの場合は投票することなく承認された。旗手に選ばれた議員が参事会に欠席していた場合は、自宅へ知らされた。順番を狂わせないように最大限の配慮がなされた。任命が早まったことで、年始から8月13日の聖イポリト祭の間までに、半年以上の準備期間が確保されたのである。しかしながら、次に分析するように、辞退する者が出た。なお、1528年から1650年までのメキシコ市における旗手の一覧は、資料1として文末に掲げる。

参事会においては、旗手の任命は聖イポリト祭の旗手として任命されている。本稿1.2に示したように合計10の公式行事に旗手としての任務を与えられたということであれば、聖イポリト祭以外の祝祭における旗手の役割を調査する余地が残されているということになる。

2. 3 辞退

2. 3. 1 病気

病気を理由に旗手の任務を辞退する議員は当然いた。しかしながら、参事会ではなかなか認められなかった。そもそも旗手の担当順番が狂う事を非常に嫌った。例えば、1627年にフランシスコ・デ・カルバハル (Francisco de Carvajal) が辞退した際、カルバハルの次に議員歴が長い人物に担当させることをせず、参事会は解決策を副王に頼んだほどであった。旗手の人選に副王の介入を求めるほど重要な案件であったと考えられる。最終的に副王は「このような理由で拒否することのない別の人物を選出するように」と命じ、これによって、病気の場合は、あらたな候補を選出することが1つの指針として示されたことになった¹⁶⁾。

2. 3. 2 任務の重複

2. 3. 2. 1 メキシコ市参事会議員としての任務の重複

議員には、メキシコ市参事会での問題を直接本国の宮廷へ出向いて国王に訴えるという特使としての任務 (procurador de la Corte) もあった。1年の長期出張となり、その任務を与えられた議員は旗手を引き受けることは不可能であった。この場合は、旗手を帰国後に担当した¹⁷⁾。

2. 3. 2. 2 メキシコ市参事会議員以外の任務との重複

多くの議員はメキシコ市参事会の議員職以外の職も持っていた¹⁸⁾。1618年アロンソ・サンチェス・モンテモリン (Alonso Sánchez Montemolín) がヌエバ・エスパーニャの受託業務担当 (depositario general) を担当していたが、前年に旗手を務めたルイス・パチョ・メヒア (Luis Pachó Mejía) の次に議員歴が長いとして旗手を務めることに決まった¹⁹⁾。議員たちが「国王陛下にお仕えしているため忙しい」と兼務職を理由に辞退することが多かった。しかし、フアン・デ・フィゲロア (Juan de Figueroa) やディエゴ・デ・モンロイ (Diego de Monroy) が裁判所での仕事を持ちながらも、それぞれ1624年と1625年に旗手を引き受けたことは評価され、しばらく続いていた辞退の連鎖に小休止を打つことになった²⁰⁾。しかし、1627年にフランシスコ・デ・ソリス (Francisco de Solís) がソチミルコのコレヒドールの職を理由に辞退した際に、勅令にあるように、いかなる理由があっても旗手を務めることが改めて確認された²¹⁾。同様に、1628年、プエブラの市長 (alcalde) の職にあったフェルナンド・トレホ・デ・カルバハル (Fernando Trejo de Carvajal) も順番通りに旗手を務めることが投票によって決議された。

2. 3. 3 経済的な困窮

議員のなかには、経済的困窮のために辞退せざるを得なかったケースもあった。クリストバル・デ・モリーナ (Cristobal de Molina) がこれに当たる。1624年、モリーナはスペインへ出張を任じられ、その旅費及び滞在費を捻出するために、年間8,000ペソの収益があったアシエンダを売却した。1626年に帰国すると、不在中に当番であった旗手の任務に当たることになったが、「食べるにも困っている」ほど困窮していると言って、旗手を辞退した²²⁾。参事会では投票を行った。結果は、出席者全員が投票し、白票及び無効票なしで、3票がモリーナの辞退を認め、11票が認めないというものであった。これを不服に思ったモリーナはアウディエンシアに訴え²³⁾、アウディエンシアは旗手としての責任を免除する判決を下した²⁴⁾。

2. 3. 4 処罰を受けている場合

本人の申し出を待たずに、免責の対象となることもあった。これは明らかに議員が任務を果たせない場合である。1624年のペドロ・デ・バレラ (Pedro de Varela) のケースである。彼は管財主任 (procurador mayor) だったが、副王によって流罪とされていた。財産を没収され、非常に困窮しており、「王旗掲揚の責務を果たし、しかるべくメキシコ市の役に立つことは不可能」と確認された²⁵⁾。

2. 3. 5 拒否した場合

旗手を引き受けない場合は処罰の対象となった。1545年には、議員としての資格停止と500ペ

ソの罰金が定められた²⁶⁾。

3. 旗手の負担

メキシコ市でもっとも旗手の任務が重大であったのは聖イポリト祭であったとはいえ、ほかの祝祭への出席も義務づけられていたことを考えると、その負担は決して小さくない。また祝祭は1日で終わりではなく、前後1週間にわたって祝われたことも考慮する必要がある。こうした負担がゆえに、旗手という任務が、王家の旗を掲げて行列の先頭に行くという名誉に見合う責務と次第に受け止められなくなっていったとしても無理からぬことと言える。

3. 1 聖イポリト祭の準備

旗手は、式典に必要な準備を執り行う事が義務づけられていた²⁷⁾。しかし、その内容についての規定はなく、当時の慣例にならっていたと理解される。メキシコ市の聖イポリト祭の場合、16世紀の議事録を分析した結果、以下のような項目を抽出した。

- 1) 祝祭に出席する副王に招待状を出し、食事を振る舞うこと。
- 2) メキシコ大司教に招待状を出すこと。
- 3) 祝祭の当日にアウディエンシア長官を迎えに行くこと。
- 4) 儀式後の馬上槍試合に参加すること²⁸⁾。

おそらく、聖イポリト教会でのミサの段取りをつけたり、市中の飾り付けや山車についての指示を出したり、楽団を雇ったりと様々な準備を請け負った。さらに、闘牛のための牛を100頭を購入してプラサ・マヨールに囲ったり、闘牛士を雇ったり、馬上槍試合に出場する自分のチームの衣装を揃えたりと諸々の準備を整えなければならなかった。もちろん、自分の旗手としての衣装そして供の者の衣装も支度しなければならなかった²⁹⁾。

祝祭には「メキシコ市にふさわしい品格と華やかさ」が求められた。旗手の負担の一端を理解するために、ここでフランシスコ・ロドリゲス・デ・ゲバラ (Francisco Rodríguez de Guevarra) の証言を引用する。ロドリゲス・デ・ゲバラは、「30年以上もこの参事会に出席し、すべての副王や大司教、視察官をはじめとした高官の歓迎式典にも市をあげて不必要に華美に飾り付けて出席した。馬上槍試合や馬上戦闘にもチームを率いて出席した。このために多額の私財を投じたが、市からの援助金は出ていない。ほかの場合にも援助はなく、18年間にわたって聖イポリト祭やほかの異なることでも多額の出費をしてきた」と証言している³⁰⁾。

3. 2 費用

実際に祝祭にかかったの費用については、議事録からではその全体を明らかにすることは困難であるが、1626年の議事録からいくつかの手がかりを得ることができた。

まず、1626年に困窮を理由に旗手を辞退したモリーナは、辞退が認められない場合に1,500ペソの補助金を求めていたことから、旗手が祝祭の準備に必要なとした総額の目安となり得る額だと考えられる³¹⁾。1584年の時点では500ペソかかったという議員ギリエン・ボンダット (Guillén Bondat) の報告もある³²⁾。単純計算であるが³³⁾、祝祭の費用が42年間年で3倍になったということは、少なくとも都市の拡大とともに祝祭の規模も大きくなり、費用負担も増えていったということな

のだろう。祝祭に1,500ペソが必要であったと仮定し、17世紀前半の議員の給料は36ペソ³⁴⁾であったことを考えると、月給のおよそ14倍の費用を一議員が負担するのは厳しかったと言えそうである。

市からの補助は1584年時点で100ペソ³⁵⁾、1601年時点で200ペソであった³⁶⁾。さらに、市から旗手の衣装代200ペソ³⁷⁾が支払われていたことが明らかにされている³⁸⁾。1601年末に補助金の額を検討することになった³⁹⁾。この200ペソとは別に、メキシコ征服100年にあたる1621年の聖イポリト祭には、1,000ペソが旗手の指示に従って使われることになった⁴⁰⁾。おそらく、この1621年をきっかけに補助金が増額され、1627年の聖イポリト祭では衣装代に1,330ペソ、600ペソが花火、ロウソク、聖イポリト教会の装飾などに支給された⁴¹⁾。しかし、この額を超えて使った場合は、逆に1,000ペソの罰金が課されるとのことであった⁴²⁾。

一方で、支出の削減も行われた。1627年に副王が以下を定めている⁴³⁾。

- 1) 旗手は、前夜祭と本祭において同じ衣装をつけること。
- 2) 供の者の衣装も馬の飾りも、前夜祭と本祭とで、同じものにする。
- 3) いずれの衣装も金、銀、金糸の刺繍、金の生地を使わないこと。
- 4) 旗手の衣装は絹で作ること。
- 5) 旗手の衣装に宝石を縫い付けたり、金の鎖をつけたりしないこと。
- 6) 供の人数は8人までとすること。
- 7) 供の衣装はウール地とすること。
- 8) 供の衣装には飾り、ボタン、袖、絹のベルト、金や銀のものをつけないこと。

こうした条例が効を奏したかどうかは定かではないが、以後しばらく負担額についての議論はされていない。再燃するのは約50年後の1690年である。しかもメキシコ市に補助を求めたのではなく、直接、王室に求めたのであった。メキシコ市参事会の代表（procurador de la Corte）としてマドリードの宮廷へ派遣されていたファン・ヒメネス・デ・シレス（Juan Jiménez de Siles）は、補助の増額を要請したが、王室からは2度にわたって拒否された⁴⁴⁾。

3. 3 公職売買

16世紀末、旗手にかかる負担額の解決法として、メキシコ市参事会は旗手の職を売却する可能性を探っていた。1559年6月24日付けで王室が旗手の数を増やすことを決定している⁴⁵⁾。しかし、旗手の職を公職売買の対象として許可したため、逆に多くが売却されたようである⁴⁶⁾。旗手という名誉な地位を売却することも購入することも、どちらも魅力のあるものであったと考えられる。

しかし、メキシコ市の旗手の職は議員による持ち回り制であったため、売却の対象とするのは難しかった。副王モンテレイ伯爵は、メキシコ市の旗手の職に関心を持っている者たちがいることを確認してはいたが、議員たちに売却を思いとどまるように説得にかかった。しかし、議員たちは1602年、アロンソ・バルデス（Alonso Valdéz）をメキシコ市参事会代表としてスペインに派遣し、旗手を公職売買の対象にしてほしいと要請した。しかし、王室は1602年⁴⁷⁾と1611年⁴⁸⁾の2度にわたって、これを了承しなかった。

1626年に再び公職売買の可能性が浮上した。その頃、メキシコ市参事会議員の数が減少し、議員職に7席空きがあり、参事会の機能が低下し、種々の出費に対応できないというのである。とくに出費が多い旗手の職を売却し、利益の半分を王室に納め、残りの半分でメキシコ市の負債の

返済に充てることをデ・モリーナが提案した⁴⁹⁾。この提案に基づき、参事会では1年をかけて旗手に関する書類を検討した結果、売却ではなく、1,500ペソの補助を要求することにした⁵⁰⁾。おそらくこの金額は受け入れられなかったようである。その後1628年、アンドレス・バルマセダ(Andrés Balmaceda)から、メキシコ市の旗手選考を国王に委ね、メキシコ市の権威を高める人物としてオリバーレス公爵に依頼することまでも提案された⁵¹⁾。参事会はこの案に同意し、フランシスコ・デ・ソリア・イ・バラサ(Francisco de Solía y Barraza)は旗手の座をオリバーレス公爵とその一族に委譲することを提言した⁵²⁾。そして、オリバーレス公爵がメキシコ市参事会のメンバーに名を連ねることによって、空席となっている議席が埋まるように、オリバーレス公爵がメキシコ市参事会の旗手として議員職を引き受けることを副王から王に進言してもらうことを決めた⁵³⁾。しかし、国王の宰相を務めるオリバーレス公爵がこのような要請を受け入れるはずもなく、メキシコ市参事会の要望が叶うことはなかった。

しびれを切らした参事会は売却を敢行した。その結果、3人の候補があがった。ディエゴ・デ・オレホン・オソリオ(Diego de Orejón Osorio)、フアン・デ・オルドゥニャ(Juan de Oruduña)、フアン・デ・サルセド(Juan de Salcedo)であった。オレホン・オソリオは2,000ペソ、サルセドが60,000ペソを提示した。副王はサルセドへの売却を許可したが、売却成立の正式決定が出ず、立ち消えとなった⁵⁴⁾。その後、1647年にガルシア・デ・バルデス・オソリオ(García de Valdés Osorio)が購入することになったが、メキシコ市参事会に対して200,000ペソを支払うほか多くの条件を提示したため、最終的にこの売買は成立しなかった。

おわりに

今回の分析では、16世紀および17世紀前半までの植民地時代のメキシコ市における旗手について、メキシコ市参事会議事録を主たる資料として、議員の発言や旗手決定の採決の経過をもとに、旗手という任務を再構築することを試み、その実態を明らかにした。

今回の分析を通して、議員にとって旗手の任務は経済的にも精神的にも負担になっていたことが明らかになった。例えば、ロドリゲス・デ・ゲバラは1597年から議員を務め⁵⁵⁾、30年以上もその地位にあった。その間、旗手を務めたのは、1605年と1628年の2度である(資料1を参照)。すでに紹介したとおり、彼は聖イポリト祭のみならずメキシコ市が主催する様々な祝祭に多額な出費をしたと証言している。また、やはり議員歴が長く、征服者一族の血を引くメキシコ市の有力者の一人であったトレホ・デ・カルバルは、1628年に、「重病を患っていたために旗手を今日まで引き受ける事ができなかったが、命の危険を冒してでも」⁵⁶⁾責任を果たすと約束している。このことが語っているように、旗手の任務は並大抵でなかったことが伝わってくる。

しかしながら、資料1の旗手の一覧表を見ても、頻繁に旗手の役目が回ってくるわけではなかった。それにもかかわらず、議員たちは「多額の出費で破産した。アシエンダを売却せざるをえなかった」⁵⁷⁾と訴え、メキシコ市の旗手の座を経済的余裕があるスペイン本国の有力者に売却しようと画策した。メキシコ市の旗手という地位は、スペイン国王の権威の象徴である王旗を掲げるという特別な地位であったとはいえ、名誉職であり、武器を携帯することも許されておらず、特別な政治権限を与えられたわけでもなかった。従って、議員たちにとってのメリットは少なかったと考えられる。また、行事が華美になってくると、その華やかさに相応しい旗手像が求められ、馬

や衣装代などに高額を投じることを余儀なくされた。つまり、議員たちの経済的負担は大きくなる一方であった。そのため議員たちが旗手を辞退したため、メキシコ市参事会は毎年のようにその対応に追われたのであった。しかしながら、メキシコ市において旗手という地位が廃止になることはなく、必ず誰かが引き受けなければならなかった。メキシコ市参事会は1530年の勅令を順守すべく、様々な対策を講じて旗手を選出し、王権の威信のみならずメキシコ市の体面を保たなければならなかった。しかし、参事会を構成していた肝心の議員たちは、旗手を拜命することに消極になっていたのであった。つまり、議員たちはメキシコ市の代表としてスペイン国王に忠誠を誓い、王権の威信を保つことに関心を示さなくなり、さらにはメキシコ市という自らの地位を正当化することすら半ば放棄したかのようであった。こうした態度は1620年代後半に顕著であり、1621年というメキシコ征服100周年を迎えた後に当たる。ヌエバ・エスパーニャの首都メキシコ市におけるこの変化は、本国と植民地との関係に変化が生じた事例として提示できるのではないだろうか。

注

- 1) 本研究はJSPS科研費24520845(代表者:立岩礼子)の補助を受けたものである。
- 2) Rucquoi, p. 77.
- 3) Ibid.
- 4) Loc. cit., p. 78.
- 5) Ibid., p. 78.
- 6) 議事録はActas de cabildoである。筆者が行った調査時期によって参照した議事録の版が異なる。手稿オリジナルは閲覧が禁じられているため、いずれも刊行資料である。本稿には、メキシコ市のArchivo Histórico de la Ciudad(以下、AHC)に保管されている資料と筆者が購入した資料の2種類を参照した。
- 7) Amado González, p. 55
- 8) Gemelli Careri, Vol. II, Cap. 6 参照。
- 9) *Actas de cabildo*, Libro 2, p. 60, el 20 de julio de 1530.
- 10) Dorantes de Carranza, p. 40.
- 11) Barrio Lorenzot, Vol. 3, foja 64.
- 12) Loc. cit.
- 13) *Actas de cabildo*, Libro 2, p. 60, el 20 de julio de 1530. 議事録にはpersona hábil y suficienteとある。
- 14) Cédula real de 1530.
- 15) *Actas de cabildo*, el 29 de abril de 1628.
- 16) *Actas de cabildo*, el 20 de marzo de 1627.
- 17) *Actas de cabildo*, el 2 de enero de 1601.
- 18) 立岩礼子「17世紀前半のメキシコにおけるクリオーリョの動向—メキシコ市参事会議事録の分析から—」『京都ラテンアメリカ研究所紀要』No.11, p. 142.
- 19) Depósito generalの職については、Pazos Pazos, pp. 294–296を参照。
- 20) *Actas de cabildo*, el 20 de marzo de 1627.
- 21) Ibid.
- 22) *Actas de cabildo*, el 2 de enero de 1626.

- 23) *Actas de cabildo*, el 2 de enero de 1626.
- 24) *Ibid.*
- 25) *Actas de cabildo*, el 29 de enero de 1624.
- 26) *Actas de cabildo*, el 14 de julio de 1628.
- 27) Barrio Lorenzot, Vol. 3, foja 64.
- 28) 1635年に旗手に任命されたフアン・フランシスコ・ベルティス (Juan Francisco Vértiz) 議員は馬上槍試合を「ほかの仕事や事情のため」欠席したが、これは「前例として残さない」と参事会で決議された。
- 29) *Actas de cabildo*, el 27 de noviembre de 1627.
- 30) *Actas de cabildo*, el 5 de marzo de 1626.
- 31) *Ibid.*
- 32) AHC, 434A, el 1 de junio de 1584.
- 33) 金貨の種類も変わっていることには注意が必要である。
- 34) *Actas de cabildo*, el 2 de enero de 1626.
- 35) AHC, 434A, el 1 de junio de 1584.
- 36) *Actas de cabildo*, el 14 de diciembre de 1601.
- 37) 200 pesos de mina.
- 38) *Actas de cabildo*, el 5 de marzo de 1626.
- 39) *Actas de cabildo*, el 2 de enero de 1626.
- 40) *Actas de cabildo*, el 3 de enero de 1621.
- 41) *Actas de cabildo*, el 17 de junio de 1627.
- 42) *Ibid.*
- 43) *Loc. cit.*
- 44) Archivo General de Indias (以下、AGI), México, 319, Consulta del procurador de la ciudad de México, Juan Jiménez de Siles al rey en 1690.
- 45) Fernández Cuervo, p. 97.
- 46) Tomás y Valiente, p. 64.
- 47) *Actas de cabildo*, el 29 de abril de 1602.
- 48) *Actas de cabildo*, el 3 de octubre de 1611.
- 49) *Actas de cabildo*, el 24 de abril de 1626.
- 50) *Actas de cabildo*, el 20 de marzo de 1627.
- 51) *Actas de cabildo*, el 19 de junio de 1628.
- 52) *Ibid.*
- 53) *Loc. cit.*
- 54) AGI, México 1684, Autos sobre el corregidor de la ciudad de México, el 13 de mayo de 1647.
- 55) Pazos Pazos, p. 373.
- 56) *Actas de cabildo*, el 8 de junio de 1545.
- 57) *Actas de cabildo*, el 24 de abril de 1626.

一次資料

Archivo General de Indias (AGI), Sevilla
Audiencia de México, 319.
Audiencia de México, 1684.

Archivo Histórico de la Ciudad (AHC), Ciudad de México, México
434A
Francisco del Barrio Lorenzot, *Compilación Nueva de Ordenanzas de la muy noble, insigne y muy real e imperial ciudad de México.*

刊行一次資料

- 1707 “Relación del festivo acto de aclamación, y levantamiento del Real Pendón a la Majestad del Rey nuestro Señor Don Luis el Primero ... celebrado por la imperial ciudad de Granada, siendo su alférez mayor el señor D. Egas Salvador Venegas Fernández de Córdoba...”
- 1907 *Actas antiguas de Cabildo*, Libro XXVI, Imprenta de “El correo español”, México.
- 1987 *Recopilación de leyes de los reinos de las Indias*, 5 vols., Miguel Ángel Porrúa.

参考文献

立岩礼子

- 2011 「17世紀前半のメキシコにおけるクリオーリョの動向—メキシコ市参事会議事録の分析から—」『京都ラテンアメリカ研究所紀要』No.11, pp.137-151.

Amado González, Donato

- 2000 “El alférez real de los incas, resistencia, cambio, continuidad de la identidad inca”, en Ed. David Cahill y Blanca Tovías, *Élites indígenas en los Andes, nobles, caciques y cabildantes bajo el yugo colonial*, Abya-Yale editores, Quito, pp. 55-80.

Cortazar, Augusto Raúl

- 1944 “La fiesta patronal de Nuestra Señora de la Candelaria en Molinos (Salta), *Relaciones de la Sociedad Argentina de Antropología*, Vol. 4, 1944, pp. 162-182.

Dorantes de Carranza, Baltazar

- 1987 *Sumaria relación de las cosas de la Nueva España*, Porrúa, México, D.F.

Fernández Cuervo, Juana María

- 1982 “El alférez real y el estandarte en Santiago del Estero” en *Estudios sobre el cabildo de Santiago del Estero, siglo XVIII*, Montevideo, Instituto de Filosofía, Ciencias y Letras, Departamento de

Investigación y Estudios Superiores de Historia Americana.

Flores Olea, Aurora

1977 “Los regidores de la Ciudad de México en la primera mitad del s. XVII”, *Estudios de Historia Novohispana*, Vol. 3, UNAM, México, D. F., pp.149 – 172.

Gemelli Careri, Giovanni Francisco

1983 Viaje a la Nueva España, UNAM, México, D. F.

Pazos Pazos, Ma. Luisa

1999 *El Ayuntamiento de la ciudad de México en el siglo XVII: Continuidad institucional y cambio social*. Diputación de Sevilla.

Robles, Antonio de

1946 *Diario de sucesos notables (1665-1703)*, 3 vols., Porrúa, México.

Rucquoi, Adelene

1992 “De los reyes que no son taumaturgos: los fundamentos de la realeza en España”, *Relaciones*, 51, Colegio de Jalisco, México, pp. 55 – 100.

Tomás y Valiente, Francisco

1972 *Venta de oficios en Indias (1492 – 1606)*, Instituto de Estudios Administrativos, Madrid.

Valenzuela Márquez, Jaime

1999 “Rituales y “fetiches” políticos en Chile colonial entre el sello de la Audiencia y el pendón del Cabildo”, *Anuario de Estudios Americanos*, Vol. 56, No. 2, pp. 413 – 440.

資料

「メキシコ市の旗手一覧（1528年から1650年まで）」

（メキシコ市議事録および Antonio de Robles, *Diario de sucesos notables (1665 – 1703)*, 3 vols., Porrúa, México, 1946 より抽出。）

1528年 ファン・ハラミーリヨ

1529年 ファン・ハラミーリヨ

1530年 ファン・ハラミーリヨ不在のため、クリストバル・マルティン・デ・ガンボアに依頼することを決定。

1531年 ディエゴ・エルナンデス・デ・プロアーニヨ

1532年 ディエゴ・エルナンデス・デ・プロアーニヨ

1533年 ベルナルディーノ・バスケス・デ・タピア

1534年 フランスシコ・デ・サンタ・クルス

1535年 アトランサス地区行政官（氏名不明）

1536年 不明

- 1537年 ゴンサロ・ルイス
1538年 不明
1539年 ルイ・ゴンサレス
1540年 ルイス・デ・カステイーリャ
1541年 アントニオ・デ・カルバハル
1542年 フアン・デ・サマノ
1543年 ペドロ・デ・ビリェガス
1544年 ベルナルディーノ・デ・アルボルノス
1545年 フランシスコ・バスケス・デ・コロナド
1546年 ゴンサロ・デ・サラサール
1547年 アンドレス・デ・バリオス
1548年 ペドロ・デ・マディニーリャ
1549年 アロンソ・デ・メリダ
1550年 アロンソ・デ・ビリャヌエバ
1551年 アロンソ・デ・ビリャヌエバ
1552年 ベルナルディーノ・バスケス・デ・タピア
1554年 ゴンサロ・ルイス
1555年 ルイ・ゴンサレスが病気のため ルイス・デ・カステイーリャに交代し、最終的には病気が回復し、ルイ・ゴンサレスが担当。
1556年 ゴンサロ・ルイス
1557年 ルイス・デ・カステイーリャ
1558年 アントニオ・デ・カルバハル
1559年 ベルナルディーノ・アルボルノス
1560年 フアン・ベラスケス・デ・サラサール
1561年 フアン・デ・サマノ
1562年 ペドロ・ロレンソ・デ・カステイーリャ
1563年 ベルナルディーノ・パチェコ・デ・ボカネグラ
1564年 ディエゴ・アリアス・デ・ソテロ
1565年 アロンソ・ダビラ病気のため、フランシスコ・デ・メリダに交代。
1566年 アロンソ・ダビラからヘロニモ・ロペスに交代。
1567年 アントニオ・デ・カルバハル
1568年 ホルヘ・デ・メリダ不在のため交代。交代者の氏名は不明。
1569年 ホルヘ・デ・メリダ
1570年 ルイス・デ・ベラスコ
1571年 メルチョール・レガツピ
1572年 マルティン・デ・アブルーサが病気のためベルナルディーノ・アルボルノス（経費負担はルイス・デ・カステイーリャ）、最終的にマルティン・デ・アブルーサが病気から回復して担当。
1573年 不明
1574年 ガルシア・アルボルノス
1575年 ヘロニモ・ロペス
1576年 アントニオ・デ・カルバハル
1577年 ペドロ・ロレンソ・デ・カステイーリャ
1578年 ルイス・デ・カステイーリャ

- 1579年 ルイス・デ・ベラスコ
 1580年 アロンソ・バルデス・ボランテ
 1581年 アンドレス・バスケス・デ・アルダマ
 1582年 ルイス・フェリペ・デ・カステイーリャ
 1583年 アロンソ・ゴメス・デ・セルバンテス
 1584年 ギリエン・ボンダット
 1585年 不明
 1586年 アロンソ・ゴメス・デ・セルバンテス
 1587年 アントニオ・デ・ラ・モタ
 1588年 不明
 1589年 不明
 1590年 フランシスコ・デ・ベラスコ
 1591年 フランシスコ・デ・ラス・カサスからゴルディアン・カサノに交代。
 1592年 アントニオ・デ・ラ・モタ
 1593年 ヘロニモ・ロペス
 1594年 ガスパール・ペレス
 1595年 フランシスコ・デ・ラス・カサスからアロンソ・デ・バルデスに交代。
 1596年 アロンソ・ゴメス
 1597年 ギリエン・ボンダット
 1598年 フランシスコ・ゲレロ・デ・ルナ不在のため、フアン・ルイス・デ・リベラに交代。
 1599年 フランシスコ・ゲレロ・デ・ルナ不在のため フランシスコ・デ・ラス・カサスに交代。
 1600年 ガスパール・デ・バルデス
 1601年 フランシスコ・ゲレロ・デ・ルナ不在のため、バルタサール・エレラに交代。
 1602年 フランシスコ・トレホ・デ・カルバハルからペドロ・デ・カルバハルに交代。
 1603年 ペドロ・ヌーニェス・デ・プラド
 1604年 フランシスコ・エスクデロ・デ・フィゲロア
 1605年 フランシスコ・ロドリゲス・デ・ゲバラ
 1606年 フランシスコ・エスクデロ・デ・フィゲロアあるいは フランシスコ・トレホ・デ・カルバハルあるいはヘロニモ・ロペス・デ・ペラルタ
 1607年 フランシスコ・デ・トーレス・サンタレム
 1608年 ルイス・マルドナド・アセトロ
 1609年 フランシスコ・デ・ブリビエスカ
 1610年 フランシスコ・デ・ソリス・バラスカ
 1611年 アロンソ・ディアス・デ・ラ・バレラ
 1612年 アルバロ・デ・カステイーリョ
 1613年 フアン・デ・カルバハル
 1614年 フアン・デ・トーレス・ロランカ・イ・アセタ
 1615年 アロンソ・デ・リベラ・イ・アネダーニョ
 1616年 レオネル・デ・セルバンテス不在のため、アロンソ・テリーヨに交代。
 1617年 ルイス・パチョ・メヒア
 1618年 アロンソ・サンチェス・モンテモリン
 1619年 メルチョール・デ・ベラ
 1620年 フェルナンド・デ・ラ・バレラ

- 1621年 フェルナンド・デ・アンゲーロ・レイノソ
1622年 ペドロ・デ・ラ・バレラ流罪のため、ゴンサロ・コルドバに交代。
1623年 ペドロ・デ・ラ・バレラ流罪のため、アンドレス・デ・バルマセダに交代。
1624年 ペドロ・デ・ラ・バレラ流罪のため、クリストバル・デ・モリーナに交代するもスペイン出張のため、ファン・デ・フィゲロアが交代。最終的にフェルナンド・デ・アンゲーロ・レイノソあるいはアンドレス・デ・バルマセダが担当。
1625年 ディエゴ・デ・モンロイからファン・デ・フィゲロアに交代。
1626年 クリストバル・デ・モリーナが経済的な困窮のために辞退することが認められる。フランシスコ・ロドリゲス・デ・ゲバラに交代。
1627年 フェルナンド・デ・トレホからフランシスコ・エスクデロあるいはフランシスコ・デ・ソリスに交代し、最終的にシモン・エンリケスが担当。
1628年 フェルナンド・デ・トレホ
1629年 不明
1630年 フランシスコ・デ・ソリス・イ・バラサが罰金刑のため、ルイス・オアチョ・メヒアに交代。
1631年 不明
1632年 不明
1633年 不明
1634年 不明
1635年 ファン・フランシスコ・ベルティス
1636年 ファン・カバリェロ
1637年 ファン・デ・オルデーニャ
1638年 ファン・デ・マラヤ
1639年 ファン・デ・アルコセール
1640年 クリストバル・バレロからファン・デ・アルコセールに交代したが、最終的にはクリストバル・バレロが担当。
1641年 フランシスコ・デ・カステリーヤ死去のため、ニコラス・バラオーナに交代し、最終的にはフランシスコ・デ・ソリスが担当。
1642年 アントニオ・デ・モントーヤが収監中のため、フランシスコ・デ・セルバンテス・カルバハルに交代。
1643年 アントニオ・デ・モントーヤが収監中のため、ディエゴ・デ・オレホンに交代。
1644年 アントニオ・デ・モントーヤが収監中のため、交代。交代者名は不明。
1645年 不明
1646年 不明
1647年 不明
1648年 不明
1649年 不明
1650年 不明